

## 第1回県立高等学校の在り方に関する基本計画策定委員会 意見まとめ(R5.6.20)

---

### ◆共通、普通科、専門学科、総合学科◆

- 教育行政の方針の中に、県立高校の生徒にどのような力を身に付けさせるべきかが明記されていない。令和4年度に設定したスクール・ミッションには高校ごとの個別の内容が記されているため、静岡県立高校として育てたい力を明確にすると、各学科の今後の方向性が見えてくる。
- 高校卒業者の県外流出が非常に多いため、県内企業は人材確保に苦しんでいる。実業高校の生徒は、授業で専門知識を学んでいるので、即戦力として地元企業に就職してもらいたい。高校でもう少し地元企業への就職に対する指導をしてほしい。
- 企業は、成績だけで人材を採用しているのではなく、人間性やリーダーシップ等を重視している。一方、高校側は透明性の観点等から成績順で人材を送ってきているので、もっと自由競争になるとよい。
- 全国的に高校進学率が99%になる実態を踏まえて、多様な生徒に対して静岡県立高校として何をやっていくのかを考える必要がある。静岡県立高校像を明確にした上で、学科改善やICTによる授業配信といった技術的な議論をするべきである。
- ICT活用について、静岡県は各高校に活用方法を委ねており、使用するアプリや配信するアプリに統一性がないため、他県と比べてばらつきが激しい県と言われている。教育DXや静岡型LMSを進める上で、一元管理や統一化は不可欠である。先進県では、配信センターの設置、教育委員会主導による職員研修や保護者・生徒に対する研修会を実施しており、本県でも統一化に向けて積極的な取組が必要である。
- 他県がどうしているのか、また、県内の高校がどのような教育方針をもっているのか知る必要がある。他県の動向も同時に見ることができると考えやすくなる。
- 自分たちの立ち位置を確認するためにもベンチマークとして他県の取組情報や、県内の学力レベルや他県への人口流出に関するデータがあると議論が進めやすい。他県の好事例を徹底的にまねて本県の特徴を出せるとよい。
- 本県生徒の高校入学後の学力が下がってきていることを示すデータがある。学力向上の取組については、高校の魅力化・特色化を考える上で非常に重要な課題である。
- 自社の採用試験を見ると、大学生の学力低下は年々右肩下がりである。また、県内高校の合格ラインをデータでみると下がってきている。学力向上に対する取組は、小・中学校段階でもっと強化するべきではないか。
- 大学生が、数学や物理の基本的事項について、対面授業よりもオンラインの方が個別に質問ができ、きちんと勉強するようになった話がある。こうした仕組みも必要なのかもしれない。

○例えば、スマート農業を行う場合には、農業従事者がAI等を扱う技術者と連携して仕事をするので、他業種との連携が大切になってくる。そのため、高校段階では、工業高校と農業高校の生徒が関わるなど、学校間で連携する場があってもよい。また、他業種との連携を学ぶ観点では、様々な系列を有する総合学科には期待している。

#### ◆定時制・通信制過程◆

○私立校が圧倒的に多い通信制高校について、県立高校として通信制課程を設置する意味を考えてみる必要がある。

○通信制を選択する生徒の学びの意欲はかなり高いが、私立の広域通信制高校では、丁寧な学習指導を施している学校と生徒を集めるだけで学習指導を何もしない学校との差が激しい。学びから離脱している通信制高校では、学力保障の面で高校卒業レベルに達していない生徒が多いのではないかと心配している。

○夜間中学校は中学校の学習内容の学び直しである一方、定時制・通信制高校でも、生徒の学力レベルから中学校の学習内容を教えている実態があるので、夜間中学校と定時制・通信制高校との線引きが曖昧になってきている。

○夜間中学校を卒業した生徒の進学先候補として、自らの学びのスタイルに合うという理由から定時制・通信制高校を選ぶことが多いとの話がある。定時制や通信制高校の必要性を改めて認識できた。

○県西部地区はまだ生徒数が多く、志願倍率が高い定時制高校もあるが、中部・東部地区は、1学年10人程度の学校もある。集団が苦手な生徒にはよい環境だが、集団の中で身に付ける力を育むには難しい状況にある。

○定時制については、以前と違い働きながら学ぶ生徒は少なく、学校へ行くことが困難な生徒が増えてきている。集団の中で活動できる人とそうではない人と分けて考えるのではなく、包括していく観点からオンラインを活用して皆が同じ場で学べるようにシフトしていけないか。

#### ◆共生・共育、公私連携、入学者選抜◆

○定員内不合格を出さないために、適格者主義を越えて希望する生徒を受け入れている県がある中で、本県ではどのような対応をするべきか考える必要がある。

○国連から日本の特別支援教育の在り方に対して是正勧告が出されている状況を受け、今後の高校の立ち位置に影響があるのではないか。

○公私連携については、以前の私立高校と現在の私立高校では役割が変わってきているので、受入れ割合を決めることに意味があるのか。

- 入学者選抜の透明性は大事だが、単にテストの評価や特定の部活動のみを対象とした裁量枠が活用されていることは時代に合わなくなってきている。もっと個性や人間性を評価できる仕組みを静岡県が先駆けて実施できるとよいのではないか。
- 裁量枠制度は部活動で活用していることが多いが、これを無くしてしまうと高校の特色が出せなくなってしまい、どの高校も同じようになってしまうのではないか。
- 裁量枠に関する最近の新しい動きとして、「探究活動」を選抜の際に重視する観点に挙げている高校も増えてきている。今のニーズに合った選抜方法に変わりつつある。
- 採点ミス回避のために全てマークシート型にしている県もあるが、本県では客観式の問題をあまり出題していない。詳細な採点基準について各高校で微妙に違うことが課題としてあるため、客観式問題に移行すべきという声もある。
- 再募集や追加検査があるため、静岡中央高校通信制課程の募集は新年度の4月にずれ込んでいる。中学校側からは年度内に入試業務を終わらせたい声があり、入試の時期をもう少し早めることができれば、スケジュール面でクリアできる。
- 入試の在り方は誰の立場で考えるのかで答えが違ってくる。学習指導要領では、具体的な活動の中で知識をどう使うかが大事なため、客観式の出題は方向性が違う。一方、採点の効率性や正確性を基準にすると客観式の方が確実である。静岡県立高校としてどのような人材を受入れたいのかを照らし合わせて考える必要がある。
- 少子化が進み、定員割れの学校が多くなると、入試が機能しなくなる。しかし、入試があるから生徒は勉強するようになるため、静岡県としてどのような学びを重視し、どのような人材を受入れたいのか考えていく必要がある。

#### ◆地域との連携◆

- 高校と企業との連携は少しずつ深まってきている。特に商業高校の生徒とは商品開発などを行っており、普通科高校とも2、3年前から連携して活動している。今後さらに活発化していくとよい。
- 探究活動に重点が置かれるようになってきたので、今後、普通科高校とは取材等で企業と連携関係は築いていけるが、もっと企業側にも得るものが多くなるような仕掛けができるとういのではないか。
- 大学生が高校と地元の企業・自治体とをつなぐ役割を果たしてくれるケースがあり、特に人員不足の小規模高校では非常に助かっている。今後も大学が高校と地域との架け橋として活動を広げてくれるとありがたい。

#### ◆小規模校の在り方◆

- 静岡県は地理的に東西に長く、中山間地域では小規模校を抱えているため、北海道が実施している「遠隔授業配信センター」のような取組を実現できるよう検討してほしい。
- 県立高校はもっと学校間の連携を含めて「静岡県」を意識するとよい。他県にはない静岡県の特色や特徴を県立高校の中に落とし込んで方向性を決めていくことが今後の県立高校の役割である。こうした取組は、1校で実施することは難しく、学校間の連携を深めて足りないところを補い合うとよい。例えば、学校間で連携してICTを活用すれば、自校で開講していない教科を学ぶ機会を得られる。
- 教科「情報」の教員の確保が非常に重要である。年度末に各高校で教員を探すことに苦労している実態があるので、対応策をきちんと示す必要がある。
- ICT活用に関して、ポイントを絞って実態調査と県外調査を実施し、経験や勘でなくデータに基づいて話し合うことで、より議論が活性化するのではないか。

#### ◆その他◆

- 企業では、グローバル競争時代に戦える人材を育成することが大きなポイントとなる。将来的に静岡県に貢献できる子どもたちを育成するために、他県に負けない静岡の魅力を打ち出していく必要がある。
- これからの高校生には、自らの力で生きていく逞しさを身に付けてほしい。また、高校には、今後さらに「生きる力」を育ててほしい。

#### <当日出席のオブザーバー意見>

- ・県の内外を問わず、通信制高校の実態について生徒も保護者も情報不足に陥っている。中学校の教員も変化に追いついていないので、調査結果や情報を共有していくことが大切である。
- ・静岡県の県立高校 130 校を接続する教育総合ネットワークを過去 10 年近く運営保守しており、県内の ICT 機器の状況は十分把握している。また、他県の教育委員会とも連携した取組事例が多数あるため、情報収集の面では協力やサポートができる。